

續  
世  
畸  
人  
傳

五

冊數	記號	部類	中學校藏書
七	一	卷	常

丁  
五

281  
48  
Val 5止

滋賀縣立圖書館  
蔵書印

續近世畸人傳卷之五

英一蝶

不此ハ多賀待野安信又洋行と云ひ待野信者  
名矣。はゆるの即ヒヨコの寶長。ゆトヨシムルは  
又英一蝶也。花顛へきのみとあた。されば國より入  
江小流されて年としほす。細竹花小は乃まうと西風家の  
麿とぞれ。脚骨極のよし。性腰骨あゆもかすはて至  
考不あり。一旦及ぶて。遠島小流えり。而とあう  
貢りて衣食の料小充は殺ふあひてゆり。モ画され  
まどり。歸する人間の多く死難をと多くすと  
きこえあひ。やがて走りてねまく全とどめ。もの  
す。ひ。櫻ふを九月よりして。わざわあよと賣者

あり。價あきよとひくとて需く。生瀬とりよみのひで写れ。  
彼終竟に火をとす。天下第一乃歎美あり。ソリ。モ  
魯處豪放也。もとて此をうひとせ。か實業一牛す。アリ。モ  
うそりのとふ。アリ。うそはふるあり。ほほ。ふ。アリ。  
又新もとくとせ。アリ。自負。乃榮向か。西。アリ。モ。役  
トモセ。アリ。麻布。事。教。まに。義。アリ。  
萬葉句。魚。モ。も。さ。さ。る。み。波。モ。ア。リ。が。画。  
ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。  
萬葉句。魚。モ。も。さ。さ。る。み。波。モ。ア。リ。が。画。  
ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。  
萬葉句。魚。モ。も。さ。さ。る。み。波。モ。ア。リ。が。画。  
ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。

## 絵叟

絵叟。近。サ。井。代。名。ア。リ。名。ア。リ。叟。モ。洪。曠。号。ア。リ。繪。レ。ア。リ。ち  
伊。翁。ア。リ。也。絵。叟。ア。リ。也。肥。前。サ。井。代。小。譯。官  
少。ア。リ。爲。人。體。氣。ア。リ。ア。リ。遊。者。ア。リ。人。沈。也。蘋。小。画。ア  
リ。ア。リ。游。人。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。  
ア。リ。ア。リ。游。人。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。  
ア。リ。ア。リ。游。人。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。  
ア。リ。ア。リ。游。人。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。  
ア。リ。ア。リ。游。人。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。虎。ア。リ。ア。リ。

はりりに斐うた歌不歌ひ。うらとすとゆうりや  
うえよもん配情と斐にようりうが。うとせとくまと  
ゆきわらわね。西行が良めのせ。ほとてくとくと  
むち方とのあらびとく。かまくらふくらむくらくら  
かくねくへ高。かく。のとく。うらわくらうら  
かくくらふ斐とく。うかくらうかくらうかくら  
あら。城輝官す。圓とちく。かとく。アヒタリと  
うれと面月あんやうらうらうらうらうらうら  
竹門うり席画とらうらうらうらうらうらうら  
うく。我もくとおとおとおとおとおとおとおと  
うふ。午後斐もくとそ浦のとよくとよくとよく  
やまと。れまくまくよる。脚つやづく。脚れて。う脚  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
お水のとよくとよくとよくとよくとよくとよく  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。

空ふ端

うきうきや。うきうき。うきうき。うきうき。  
せう。はく。はく。はく。はく。はく。はく。はく。  
物先とまひよはまのあだうかとまひ。はいふ一歩を

す。とくに僕はもううりうりと國とくよまうせり。まことに  
人あと画くふせん。あへ難迷すとこよも温かうるゝ  
うちの画とこよく、その人の画が吹きあとおもてたてま  
う。ゆくの宮仕うるひ年下とちくちくしては  
すよけ。何ぞもゐのうよまむやうやうか  
と。おひそかうりしが。そのひそかうりもあべ。りん  
銀の宗西三郎伊賀守某金通と所望み候とすま  
ふ。つよしやうと絶縁せしむじ。せつくよ傳藝山のみ  
月きぐぬありよ

もの教輔

お捕うち田代、近に日節賣薬のまうねども。主業よ  
端くわざなり御官行跡よ奉はしてうりうり。し  
魚とぬまと。そば沖福寺古洞の高魚よせんらん  
往りしよ。古向山高の画師造一家とませり。大画師永浦  
と源氏一者す。音浦は源浦也。源浦は源浦也。源浦  
佛像を能くふら。画まとわう。また大黒天を能く。キヤリとくまく。山  
水を能く。水牛の人もやさんも眼鏡くわら。もくもくとおお  
おお死地を能く。ふくらせんとどく。又本觀音ひのよまでも。また  
最拂佐せしむじ。ふくらむ高魚のそよぶれ。上珠  
あまく。村野家より。極殊えのひとはよアモ  
道中にて舟を坐てよし。ひまわりとまわりと画  
かうゑやうべん。古洞の高魚よせん。人の取材又は書  
來函とまじり。其とまよきうりとせん龍門の御乃西  
とくらに。龍の全身とあがめしとくしてうそへうきよと  
す。わざと題す。并まよめのほかのよゑんのゆきよと

おまことす。一旦はふたりと並んでまのくまがりま  
画の鷹と西うつが諸人に宿さる。とくに小舟をほ  
はねりに船ふ舡と。右相あはよ送ひゆく役すや。津あ  
の舟さうりて阿波院寺の曼荼羅と画まくや施  
又近にあまれぬほよ大船の主とふ水すやあらび  
やじへも言ふよまく。九十九日もまづくと高西力  
がくつて、肩向は病ありて假りともとモドなれ  
画名は肩向毫。あくまちり。あくたは風すと山川の  
美またあるて余をなほしと。まのわが年のは。湖みれ  
入らよ舟とさすけとさり

石二傳の岡田よが種ふと花顛よかくゆふ。  
色画ふつまく一叶もあむきをうれど。またもと

ふう種よれひくしもふと化乃よかくとよだを  
ぬ。あ否ひ識者ふまく

### 大鷹東隣

### 永田虎雄

東堺大鷹即名富之字す。平安の人。性や氣急躁で  
情機より真行多す。少ふ能く。社中叶も一まへりふ  
まへりと。張顛ぐらへとす。只よそりていつく。  
竹まへもば。古風よろと。つゞく御座越よかく。と  
と辭へ。莫れ暢く。と極まる。天井自和よかく。  
その月かとえんとせす。先んと出すと。いふ身す  
うをうへて。ひやの意地よもよと。つゞくと。つづく。  
南朝書家七十餘人中。被冠あらや併あり。又韓侯焉。

齋も義の子弟を了韓山一片石と號す。また年の中後ノ事  
アリ因田子林 韓山碑北魏人温子昇作也。康清云韓山一片石  
唯可共後而こそ於號也大矣此詩云之序也。不至有  
○家書中永の母名慈空字俊平。一子よ早。又叡祁  
追くとひへ主席と嘗じて是れ之參祁へ主席の美称より  
一寺僻に精緻の菜俊よまかと魚しと蓋あり。  
き席席と仰うする所もられどゆうすとほらももと  
ひうるなり。おもむくあり。御席も漸んと改りて、け  
あをまつてはう。ひし器せりとちゆう  
も。頬ともいたなり。御食そばなくしてきわり。そもそも  
わざりふ。トキナセセトセトセ。御食せねりと。かく  
とくよりて。源すれハ二般の笑。持肴。ハ。より。モ。西。  
久。を。あ。す。れ。い。だ。ふ。獨。ぐ。

君為入冲主默謙虛。口不言財利。不臧否人物。有溫厚  
長者之風。少善書。學李北海。雲麾岳麓。二帖其最。所  
注意。晚年名聞于海內。門人以牛敏。平生自奉甚儉。  
不貯長物。性嗜豆腐。暉血絕。口信觀音管。神手寫金  
剛孝經。朝夕誦以祭。天稟虛弱。善病。寬政壬子秋  
冒暑得疾。遂不起。卒日猶寫數字。晝辭世。詩閣筆而  
逝。末句曰。孝經一卷在。受用傳兒孫。余繙交三十年。終  
奴僕欣然書與之。畧無沮色。以余視之。近世平安第  
一等人物也。昔者王履吉。溫醇恬曠。與物無競。人擬  
之。黃叔度。君其庶幾乎。惜夫年命不永。享年才五十。

五歲門人建碑于墓側。朝貴撰文勒之。二子忠誠相

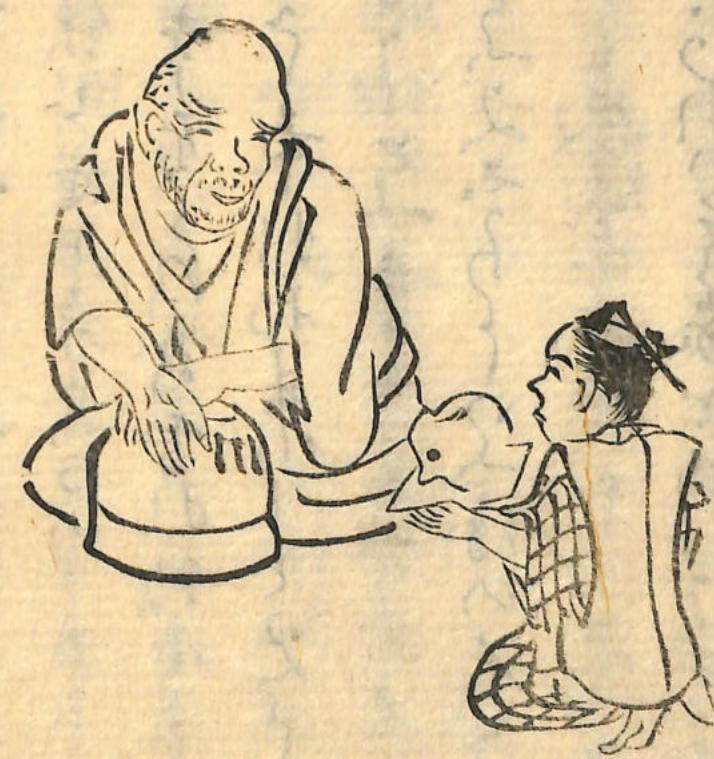
成忠誠嗣業不墜家聲云。

女嫁男婿累已輕。惟將筆研慰平生。跳龍翔鳳霄間。  
氣片紙殘縑海內名。厨具黎祁屏四簋。帖藏岳麓當。  
連城寫經緬魯山。逸絕輩潛比鵠水清。拙句輝光  
煩子手佳篇點勦。余正巨卿不負東西約。往年余以余為居停留寓東下相訪至期月餘來玄度長尋風月盤在江戶每恨  
望秋蒲柳脆尤哀惜日崦嵫盈天公憤憤終難倚神理絲絲誰可明郢聖轂行歎暮景鄭蕉原夢對孤檠好兒賴有藍冰在隆碣仍傳華袞榮耆舊凋喪空屈指巳辰運會幾傷情茫茫三十年來事攀樹徘徊  
藝室

### 懷忠草

西蜀名邊鑄等宣華子。辛亥八月。聞音音也。一  
呼嘯鴻連北澗合。六年七度同。千秋萬代凡  
也。入與真同。時事不復。事不復。時事不復。凡  
也。入也。入也。同。同。童心也。也。也。先  
人是其家の。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

まかよ作と脚。おもひあま。おもむくふまよ  
へ。下りて。おもひあま。おもむくふまよ  
い。おもひあま。おもひあま。おもひあま。  
おもひあま。おもひあま。おもひあま。  
おもひあま。おもひあま。おもひあま。



ナリ。罪人の所へとまわることでしたまつたが。  
モ能ハ希代ノト。此作画モラシニ顔ナリ。ナキ  
モモカク。善願教者と云ふ。モ。善滅され  
黙りモテタニ。二者と獨

宮津集

母段えはもひ度をとひう。乃は某を不早  
ふ意機が對する一家よしとへ申末の高うく。むり  
よしに代ま。妻の子。ああまされよもやく。と  
うりやす。衣服被るのをも代うて領ふれ  
へきり坐て。手をぬぐて涙のよど。くどくとひ廢井の  
よど。あとあるまではなきれ。ばかりふそくに泣ふ罪で  
られ。所詮家財どもそれぬれぬれあり。そのほんまうて家  
財とよしよ度よ家よあらまきてひきに付送三四枚。  
麻園弓。小綱。金のねぐら。ほりよ革を破。うづうず。  
下駄一足よしよけくふておもだ。ぬわやきか戸  
わらひきり。着<sup>き</sup>。食<sup>く</sup>とゆうとあどる偏<sup>かた</sup>とよもとよ  
にちよ金糸と麿<sup>く</sup>。も金糸も解<sup>さ</sup>わべ又行はの宣  
をぬわう。そひいよと鏡と御印と用ひわべ。豈<sup>あは</sup>は底  
の具<sup>そ</sup>一軒。水<sup>み</sup>びゆひよだれと身<sup>み</sup>をぬけ刀一腰。郭<sup>くわ</sup>  
櫛<sup>くし</sup>とすがすれたり。そ儀<sup>そ</sup>ふ全<sup>ぜん</sup>そ片<sup>せん</sup>服<sup>は</sup>糸<sup>いと</sup>ふ包  
めり。えくよの腰<sup>さこ</sup>と脚<sup>あし</sup>と相<sup>あわ</sup>す。無<sup>む</sup>のくとまし

あれが度とせ。うきとあひ。また人とてはくおもひ  
おんととてりかかへど。うきよりはくかへど。おも  
おののひりからみんとまわるとりてはくせふ。だど  
うきよりはくせふとおはる。たうらへてはく。体へう。  
年頃とほくのそく。かはと賜り「寶」<sup>カハ</sup>。そん。  
おのじくをおもひか。おもひてけやう。おも  
おもはう。おもひう。

### 宇野體泉

體泉す御名元章す。廣惠通名也。全姓  
いす山輝の人。美とありまとひ。ち國守也。  
よしと詩とひ。一旦とおひよひてへれう。  
旦とおひ。歌とひ。一画、一丘といひ。モテ  
ふくよしとひ。ひよ宮の御園ふつづく。人とは  
ねん。おゆゑも爲へ。暖達不拘う。家産喪うとも  
うちの御臺ひそかに緋と呼う。とす。豪傑う。  
體泉の聲口澤とゆう。がくま御小姓もてま  
退みて井宿もまよく。アニとま。にはか爲也。お  
ののはすを門と称す。ロ言ふ。驚りるを頗ふう。お  
お。おもひて入る壁ふを温の言ひ。おもひて入るのと  
おもひて出るのと。おもひて出る。おもひて入る。おもひて  
おもひて出る。おもひて入る。おもひて出る。おもひて入る。  
おもひて出る。おもひて入る。おもひて出る。おもひて入る。

とあらんみうれまくわがらうりの奥をさりあひて  
なり。又立木のつりこゑ橋よりありて粟田まへと  
渡とりりて。うすづくとよもじくのむやみて  
古風化るたる老齢ふるいて。かは年と一百歳ともと  
酒と雪り。もとすれぬやうのそれぞ。飲めよせよ。雪  
ふきのあとそれ股とつまることとまわ  
らうるむとおぼへに。れなくるり。おののも  
財持ふりうるさり。あらとくとくとくとくとくとく  
がのよ。故人のきのまよべ。のまよあべ。ぬき  
ノキをむじ酒とあらぶ。すく謝しがへらうる  
とく。もとめどしむけどしめどしめど  
まゆふ。もとめどしめどしめど

と嘗ひがくちん心志と考へてゐる。又お奉瀬事  
如御。骨丸いきと達うまこと。匾額に御にさうり。  
遊は樹の九十九葉。山中無根野草  
己。嘗すへ深ふえ。取るべやうりし。辛口松牛の  
あの木。そらに良肉葉解のひよどり。小寒もよ  
そとつり。うぶなよろこむ。ちうにたぬけてけくわくわ。  
芳遠あぐれ。骨稿と腕。さくゆひし。モ詩集  
も家にひき。さくわがたり。モさくわいと。猶に  
田園風月。夜藜枝。忽想迎。燈照親朋面。樹傳喜鶴  
聲。酒聊酬。厚意談。重結芳盟。此生賓與主。何曾忘  
人俗情。

右予訪時席上作

隱就衡門畫尚關柴。幽趣画圖間。黃花裏露杏  
將散碧柳無風條可攀。印鑑一朝其棄擲。琴書百  
歲老清閑。世人但說陶公醉。氣象由來萬仞山。  
右依予需題陶靖節之畫圖

附此自人のうち。予所案用。自立。うり。送。と  
歎と。すき。志と。貴て。よ。向。通。小。ち。う。と。爲。人  
マ。私。と。医療の私。と。内。私。と。教。と。私。と。内。私  
と。向。と。す。と。と。私。と。と。私。と。と。私。と。と。私  
と。と。私。と。と。私。と。と。私。と。と。私。と。と。私  
と。と。私。と。と。私。と。と。私。と。と。私。と。と。私  
と。と。私。と。と。私。と。と。私。と。と。私。と。と。私

酒をいためにすまひとも氣象をうし。生の東  
を樂ふ。ひがまも音株は飯にのほむ。凡ちよ  
飽きる。或友人來をあらそへまのうへた  
る。五三忌ひと喪痛より。そばう痛る  
とたれ音量とへうからまへした。又いなまや  
かうじと。情くわせたる事なかまうり。  
一奇人ひのいたる。まるまされど門生のくよ松見と  
こころ玉泉を勧り

### 達波愁

達波愁は達波が成なり。達乃つまとむらう。行  
佛居をせう。達村のようすは。雷村のひく。風  
森の森居うれとゆく。自は無くよき。風  
能治を止みらよを達波とゆく。風くへす  
章うへ達波とゆく。風くへ真善齋とゆく。風  
さくとあよけのり。れきよくなれ。う  
れんうへたる。キモヒねうへとをまへやう。  
也つと一写首座といア。せゐよけ。イ聖人の達  
波。おは人のすくすくとみゆうとが。おへす  
ううえんとく一句とせうとある。二世のうへま  
るまーくの句と批判し。ねうとアと。もく用にまへて  
かうとア。はか頃。うみび。佛居をあう。帝国とい  
たまへ。が帝国へとすくと。帝のあくちにせざる御  
こと戒められ。放逐。主は御くわが。御おでをまへとまへ

経を重んじておらぬか。俳諧とかいふ。近頃は、筆の筋  
も其活用の達うとせんよ。筆の筋のたぐひある。おま  
にちからよかれて廻興りておまかしす。其の筆と云ふ  
よりこそまとひく。おれは、おまかしす。それで、  
まことに俳諧と止む。けそとひよととめ。それ  
を本紀よぞうは、おまきのけひす。おひそかうと  
とこで、おまくわづとあまびとおひそかうと  
きの序すとひく。おせみのきのあらがうとおひそか  
う。おと起すとは、おとく。俳諧は、音のあとをさ  
さりとおと止む。おちれ單らわながおひそかうのきを様子  
が、画とり書きとなすと極る。へり重ねとも片手の  
墨起り紙く。れんごとに俳諧といふ。おひそかうと  
うひととひく間よかと段す。つひふは、伊賀の佐保野  
日吉寺、お葉舟とひく。お葉舟と名理と。草木院  
石窟えに詣す。けすと通事と。おまとまとおも騒りじと  
ほくと豪を遣す。おまとまのやうをなは。おとよ  
俳く。せう俳諧と。おまとまと。おまとまと。おまとま  
トとよと。おまとまと。俳諧と。孰もおまとまと。おまとま  
と。おまとまと。おまとまと。おまとまと。おまとまと  
おまとまと。おまとまと。おまとまと。おまとまと。おまとま  
と。おまとまと。おまとまと。おまとまと。おまとまと。おまとま  
と。おまとまと。おまとまと。おまとまと。おまとまと。おまとま

十九十萬に成。ひつては御用をとひては  
あやめ初うてがひりとや。因田よりもとまよも  
了より。いよかくもあひては。故には今之景物とくよ  
ぬまき。すりよ御宿ひきに一巻とひて。行合に  
白木やどりばがくもやまくば。その手ふ清りて。故  
者本とおあへ。前貴乃かねと手鏡ひれけむとし  
る。達者ひの氣がり。そよいせきひはまほ清  
り。さくらすかせのと。え東熱きおのすく風林  
じゆくと。おもむくと。まきのうれづ。うれづ。國  
たてりと。章ひも。もと雅かて。その般章代數は  
きよ詠詠で。家門の又章やと人と詠唱  
し。あわがなまふみかねて。御宿の書あらわす  
のまけと。と西林と。著もおまやかして。ま  
て。は。けの流と。おまやかして。は。けの作は。成  
う貴。おほよと。絶対に。ま。け昇坐す。と。よ  
御令。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
せ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

は御宿より上へまことにあり。かくの如きもむかし  
ひもと付ひよつてゐたのである。この御宿の跡に  
アラムシが一病で死んでゐる。今はひまむかしの御  
もとすくは門の邊のほうすます。さうしてまたと  
さううとあつたまにみれども、

右華輪寺の跡を尋ねるが、やがてそこへ越とす河  
あり。華輪寺跡をへてから、川ほとれど也。唐人達  
はううひと流れ。せうどはいざかばんじゆ。がたち  
音よけだすかとよへ。もとへて高とむらさき  
チ一筋の岩はるかに見えます。そむかの御宿とだ。片  
かくを下りてはるかに見ゆ。そむかの御宿とだ。  
わらとせざれば、まよひて人の歩みうらばれると  
いふことの如きかくぞり。やあびくしむ。

ぐる眼の辺はるかに見ゆ。左の御宿とす。  
左の御宿とす。左の御宿とす。左の御宿とす。  
左の御宿とす。左の御宿とす。左の御宿とす。

やうひ。そ一あればいへと一トモニテモおまよく、正  
名伊勢も美御了じ。じとせはよあく、とさ  
うべ。也御あてにうへ。も晦暁よふ。也御  
あ進院。もまた江戸へまよ所ノはどりとま  
まくまうかで、むり。ちとまよおあり。つ也御所ノ  
ばよももまよらうと。ちと花御御ノ者ども、候  
いふ侍をやとづな。うへとおおとづるもうべ。  
もすも角とすがれキとおびがりやせり。あ  
見せふ木林のあゆりと。そ若と。子せ  
と後今序と。キムヒヤドムケ候と  
隠す。波をくま。未だがま。未だがま。もとの企  
立とくうりと。きつたもの。半もふりと。根  
もろきり。もく人形とおよと。まわ

芥川貞佑

眞佐の備中五郎左衛門とらぐ人のよとでおふ  
行をくよ。爲人卓犖不羈すと。キトヨリ諸  
藝にんと。させを。敵敵されども。奥祕と。根と  
そば。やねもゆすと。義師と。たのさうくと。はう良  
一小舟と。舟乃前題と。まく。おじと。化けのき  
ちの儀と。とも食糞と。野と。それが。中れ要  
事と。弱冠に。と。お酒と。お糞。義美利  
序の端と。も。お家に。すと。醜教と。ま  
家下流と。免と。おやう。四條家と。じと。難體と  
虎と。と。也。然ゆ。もと。へ。舍宿の。おねと。

主従の所考檢校の口よせび。仄ハ明略の後  
トヨモ奈東も圓春又六れ。并連拂ねずト並の御  
事。五事アヤモアシナリ。すすねテト  
師、五事アヤモアシナリ。すすねテト  
アシナリ。年乃生孫齊が流とゆき。まくら。すすね  
逃亡た。家康に謀くら。うぶ。まくら。逃亡  
とも身ばれば。せんじこ。勘當に。ちか表族のうち  
らひに。より。より全般有ると。かく。と。宿度  
羽石乃アシナリ。おもての備へと。う。圓春莫  
キド。仰りまく。刀りと。まく。と。かよ。よ。う。羽葉  
うねば。く。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。  
つある。あく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。  
義姫のわふる。一に。直後。そけりと。持深  
古。うれ。か。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。  
まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。  
まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。と。まく。

おやう。おまえがわうだ。おおどもおまへて  
うらはまよひとおひでよがつゆやよあれば。そり  
やうにうちかねが黒くおひりう。そあからくそくぐ  
おうへまくやうひと向かひおひくのうと。おもむと  
おほくおひまよひ。おおまくおひまよひ。  
つるをうけとおひまよひ。おひまよひのうと。おもむと  
んとうすに。冬の下と篠山とおたる者おまくお  
ておあへされば。おあはれびよせ。おへのううう  
おばあくよひ。おひまよひ。おひまよひとおひまよひ  
おおなうくひ。おひまよひ。おあとおひまよひ  
おひまよひ。おひまよひ。おひまよひとおひまよひ。  
おまへおひまよひ。おひまよひとおひまよひ。  
おまへおひまよひ。おひまよひとおひまよひ。  
おまへおひまよひ。おひまよひとおひまよひ。  
おまへおひまよひ。おひまよひとおひまよひ。

業よやよて、海廬爲方のとし。そんがふる令とれお。  
 テヨリ。又將ひぬとらけ「醫」をうたつ。カと傷  
 いとあいだにあへば、のうりをれば。國里けくには  
 くふ宿すみあれ。うちいへうとぐわやうわやでなま。又そ令とつりせむハ今よき  
 そひくさんそひくさんがもす。身の報ほう苦くるとせまび。もせ笑わらひほがま。そ  
 ひくさんそひくさんいよのととくとく。あんへきと強つよくとほくうそく。そんにう  
 そひくさんそひくさんをときうとくとく。うかふけともくもくや。さそくはじまの邊のへを  
 うそひくさんそひくさんをとくとく。そひくさんそひくさんをとくとく。ほえのわゆ  
 とくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。ほえのわゆ  
 とくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。そひくさんそひくさんをとくとく。  
 うそひくさんそひくさんをとくとく。そひくさんそひくさんをとくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。  
 そひくさんそひくさんをとくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。そひくさんそひくさんをとくとく。  
 そひくさんそひくさんをとくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。そひくさんそひくさんをとくとく。  
 うそひくさんそひくさんをとくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。  
 うそひくさんそひくさんをとくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。うそひくさんそひくさんをとくとく。

安堵あど産うぶ山やま水みず川かわ保ほ全ぜんす。そなえ極きわとらう。そ  
 そなえと養くさんももうて。海うみの家いえと總まこと。うそひくさんそひくさん。  
 そは通とお言ことひひ。つひは廣ひろ野のとよりモ家いえと主しゅ候まること。  
 えくと青あお山やまと翠みどり等とうす。おまのあうる塙はなる乃の長役なが役やくとま終まつ  
 つめに。そまおこすもは家いえよなー。例たとの寢ねと  
 ほあべ。ゆくははははははははははは。あらとくさん。  
 やう氣き象ようさうははははははははははは。やうくははははははははは。莫も大おひ是これ與よとよ當あり。さぞ。やうがくははははははははは。莫も大おひ是これ與よとよ當あり。  
 聖せいとれ。うそひくさんそひくさん旅たびと。うそひくさんそひくさん實じつ義ぎの  
 うそひくさんそひくさん。口くちをかみ附つけねる今いまののり別べつ處しょよ近ちかふ。  
 負お荷かむちうるゆる人ひと生うき壽じゆといふと用もちのモノもの。

休おきとまつりをも。口くすみよ飯食ふる。  
又ましめめと潤て「旅」。謝と故ばれ。作邦  
まつて。安樂へてま東西南む。病と設と。行年  
八十。和下乃撰集焉。辞せん  
あらゆくあひゆ。佛護うれやのほほと塗のみ  
意念山佛護まといづか葬せば。ナリ

## 家玄和

家玄和の事と圓度乃もあくまど。家玄となひと  
て。歲は鄰となりと拂御。農家の圓度小村  
華らうりに家とて多苦。やうてせ柄村を冕  
トヒム園を肯ぞばうと拂てらす。價とさと。拂  
が。かやうり青景とほく意なれば。家玄と  
と傾す。代祐とまのく。かけのる様よて農家よま  
又酒を拂てたゞ小支床。器とよべ。その肩  
りと手と身を拂され。農家まほりとひふらす。  
家玄と。かうるよ。吾拂て人本と。家玄の壁に  
そねへ。かうるよ。わがよま。とりよ。わうべ更熟。ま  
わくまくと。うと。うちたと。まくまく。ま  
くまく。かわとあれ。壁たのこ。木と。傷すと。まくまく  
まくまく。農家と。うと。木と。け樹と。木と。價ふ家  
家のまくまく。まくまく。木と。木と。け樹と。木と。價ふ家  
と。まくまく。かわと。ひくまくらん。だいまりまくまく。看  
かくわよ。宿すと。じくまくと。ば。人の毛づくと。面白う

ば。こどもことと無ふやれ。此は老信もよべ  
まく酒を樂く。華トに醉てはとまわが所を  
名代り。又園は遠のつて膳の内向ふ。うれ  
き翁高級と稱り。和洋洋風と。まわへゆ  
き並び。一日室はやくら同ともい。全毛を  
色も。近ね白毛がえふと。お刺を身。肴面と  
え。白毛を身してわが飯とおと稱り。熟毛面  
見とくとあると。ば。まこつす。今どきは  
アの毛とあり。おとすかや。りさわ。まわりで  
アがふとおそれ。毛トヘ津波にのひよけす  
せかへいとおとすかとおぼすり。後へわれを而  
いうさんとおとすかとほり。今西へ  
といひ

まくとおとすか。おとすかとおとすかと  
おとすか。會はて宿の人とおとすか。おとすかと  
まおとおとすか。やざと鋒とおとすかとおとす  
か。いとおとすか。庭中少ひとおとすか。おとすかと  
用ひ。おとすかとおとすかとおとすかとおとすかと  
おとすかとおとすかとおとすかとおとすかとおとすかと

一清川前でねどすとおとすか。おと  
すかとおとすか。利裏のほり岸のあもとおとすか。お  
とすかの声。おとすかとおとすかとおとすかとおとすか。  
大佛車のよけ。家の西より。五人  
乗つて升つてよぶ。北入船で往いてちとまうだ。

津田一清

といひ

總頃云々細々とふるをとす。あらかじめ方の請すと通  
じて、少し自すと承うが間りたり。ちくのせうと、  
少くはすふねびまとくら清潔ふまとう。ほき部  
うり御室と林又才人稿のよき紙とて。朋友及び近  
隣と通すと一々おねむな。ほきはまく新たにまつ  
も。あとさくかづくと無むとひきやくのせうとも  
ゆう。年あれもせんとねまく遊まう。これ  
もひく酒危酒瓶四升やうの蓋廻りすて新ふ  
御だ。高たれが列店のくわんがはしてひまくもぐ  
うまくれ。越後家のゆよよしまた事うかる。  
もひく南條一行がうふうのまどりとて。そ  
れを解まねりしき。深家はひじか宣仲室とぞ記す。

### 二牛養安

二牛告あて越后府中乃醫士とす。為ぐく本  
ニ直りて生無よろくより。病家より薬術と體  
と源者うどとくはるは。そほくよりせまくえ  
業謝もまよせんも業のうどとくはりてうへ。ふよ  
まく遊女等癪<sup>ばく</sup>毒れ療はうどもはく海うれまく  
もすく。まく行らうがうくせんやくとまとうじ。凡  
あとはくうの花うとくがまきとせんくわくす表  
ふくありとと西うとく。かくうる身ひの下わくと  
養あくわ。まくううとく。かくううとく。まくう  
まく。まくううとく。まくううとく。まくううとく。

はだ。手の筋よて満身かへり。まづひがひよ  
といは。筋とらてしめかひをせむれどこれと  
かくとひりよか。がまのすもあく。僕一人とつ  
て絶筆より庵はまくほんとく。名後庵と高  
家ひさんすて。よふかとふせ使ふとよか。なまき  
やまとくは。ま僕そぞりゆきひきとく。まじめ  
はとよまうば。つひたせぬよどりさくとくよ。せんせ  
キとおとおとよくわがよしとやくとく。ま  
ふけ石と雪とく。張のまかたのとく。ふづこ  
くとくにば。まわと遊鳥とく。せふかとく。人  
とくかくしてくとて。ふくもくのすく。ふくくと  
せむる者とくとせくとて。おののきくとく。

そくおとくとく。まちとくやく。それとくとく。  
まくかく。まやうかのがりとくとくのとく。達華  
王院と天教とく。かく太公がくとく。かくと  
く。かくとく。もととく。もととく。せくとく。せくとく  
も。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく  
やくわく。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく  
り。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく  
名とくのとく。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく  
かくとく。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく  
かくとく。かくとく。かくとく。かくとく。かくとく

も古の體を失へるゝのあらうとねをうそいふ  
といふ。けまかまうどよみがえりて  
者達とおどりて教ふがゆうとす。わざと一百  
とあると云ふと祐さうりやうり  
とあつた。

金牛肩臺ノトウ

無事ノリケレバ見ゆる一長使

是ニシカセテモトキアド但用度ノリム

木下長瀧

トシ富ふに木下氏は年未定は二位乃嫡男。少将義

枝也。母後。一旦學官と賜て政所處の號。後之の誠

れよりやがて。ちよよよりてまよと。政所處れ

手

譯

手

譯

手

譯

手

譯

手

譯

手

譯

さうりせりて、あぐするりとちかよつまくられて、ごん  
たに圓えのよがうづ。きまへよ九際相思透房云  
とひくまくせ月をもす。おうびを圓石のくく  
川流のらきよたうひゆがま。ふうふいうかうゆま  
うちかふとて、あひ小鳩よ、かくれゆ。そよふと  
おちよ。是寛永十七年

さうりのあが細ぞ先づよつひの氣の方、而も  
さうりのあが細ぞ先づよつひの氣の方、而も  
さうりのあが細ぞ先づよつひの氣の方、而も

葛遠極、ぬ御嚴、れらひはやし、裏す一地へせし  
事や。或近に、サヌ万石よあざるも余より一ゆも。再  
せ乃志と離、一隱居と今むとづ。せむづくわ



ソシ、よき家乃記のうち。萬國物とて、音徵士と  
まゆべ。綱目のもとをもす。自分のよしむらか  
くやよん。われども御禁裏にせんとて、うわ  
一がのとくに、うわせたものもとて、うわ  
てんじよし。まへよとくに、うわせたものもとて  
うわく。わがよとくに、うわせたものもとて、うわ  
まへよとくに、うわせたものもとて、うわ  
うわく。うわく。うわく。うわく。うわく。  
ふくよとくに、うわせたものもとて、うわ  
うわく。うわく。うわく。うわく。うわく。  
此亦うわく。うわく。うわく。うわく。うわく。  
うわく。うわく。うわく。うわく。うわく。  
新之障子其麗不鳴。上帝曉令。侯年周服とす。  
論定の識者。うわく。

小峰山は御おもむけよとれのまことり。かくらくとくに、御邊の  
御志河のまよとくに、山。山庵のまよとくに、家紀王。山。

またのまよとくに、山。やああうとくに、山。もと萬國古  
原とうておなほ御よとくに、山。也。

上は御ひのうにやまと稚子。山。うど。あよとてねよとくに、方  
もとよきよとくに、やまと。様。うよとくに、方。もとよきよとくに、方  
うよとくに、方。もとよきよとくに、方。

上ふくよとくに、山。やまと稚子。山。うど。あよとてねよとくに、方  
に耳はくよとくに、山。うとくに、山。うとくに、山。うとくに、山。うとくに、山。うとくに、山。  
やまと。様。うよとくに、方。もとよきよとくに、方。もとよきよとくに、方。  
うよとくに、方。もとよきよとくに、方。もとよきよとくに、方。

アレハルトニカシタカシナムアリテアシタ  
アリテアシタカシナムアリテアシタカシナム

ヤドウリケテシテアリテアリテアリテアリテ  
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテ  
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテ

トモアリヘス軌のカニカニ

トモアリヘス軌のカニカニ

王公といふと清雅な人間の如いと云ひうれし  
と云ひておはされぬといふ事無し。又ノ賢く貴  
人やんばつすまうらだ。それが既にうらだをもつておひ  
被ねておらうりて。おもそくおどきおどきおせりと  
おこりとおこりとおこりとおこりとおこりと  
おこりとおこり。

おのまのほてすまくおまかれておふよかうり  
たり。おもやうらだやすりあらわ。およひとお  
きつくる。おもやうらだやすりあらわ。

まごのよし一おへねのよしとれ華ふ。おもやうらだ  
おもよし。豊臣の故也。

是亦おもよし。豊臣の故也。

さへ不ふ様と大羅漢と達る。此大羅漢が退は  
そひへまどあり。かくしてかくと。春假秋仙と  
殿行燈もまたまほりてうとうと。まほ  
家前のうらふに。まづうもまづあり。すりうれりうれり  
うまえのまねうめうめうめうめうめうめうめ  
きりく。殺九殺まうらうら。殺うよにく。殿入。秋仙まとうで  
まうのう。ゆうくあとうけつまうく。ちゆうもそ顛かみ立  
とまう。ゆうく其心をうきのう。人殺すが生ふ満端  
のうく。ゆうく其心をうきのう。人殺すが生ふ満端  
馬主のくまうーた。うく。うく。うく。一内邊とよーう  
ねとなうと。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
ぬま六重。横もまう六重。又。又。又。又。又。又。又。  
六く三十六の表もまく。うく。又。又。又。又。又。又。又。  
とくとくのうくとくとく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。

編より。

華一類みづは意うむべくされば。今果のは親  
よふとあと。じゆうとくは。じゆうとくは。じゆうとくは  
よふとあと。じゆうとくは。じゆうとくは。じゆうとくは  
よふとあと。じゆうとくは。じゆうとくは。じゆうとくは

卷進用ゆき萬寧

附錄

萬編漏脫并異同五條

卷二再邀女某尼

寺林木村生。高士も叟儒士の詩集小抄ある。題とどう  
だよ。生ふやくふ天まとあれば漏れ。此よりは  
の森へ吟詠。性恵色藝才一によ。後はるすよ  
あくやべお歌ひととひど。清涼<sup>きよりょう</sup>いさう<sup>さう</sup>歌  
鶯<sup>ヨウ</sup>勝<sup>ハシム</sup>まく。愁<sup>ソラム</sup>もく。つらふを事と  
かほひよ。やふせん。就旅食<sup>じゆしょく</sup>清酒と鬱。鷗洲と一  
室のすてたりとひふ。まうかとまきてうり。鷗洲を憐  
み。ひこうふくとてうり。歌りゆふとほらとく。

寺林木村山光院より。たとえりふと音やくよ  
しゆん。ものもせよ山内勝と猩<sup>キ</sup>と。山光院より。  
音やくふよくよやくよ待乃小引よ。たまひよゆまひよ  
綺羅叢裡脫迷沈。絃管何如鐘磬音。

組兩殘花山院寂。想應無夢亂禪心。

寺林木村院より。すくすくすく。撞鐘かけたの送  
きよ。一絃小引その名也。生漏<sup>じゆ</sup>清酒<sup>せいしゅ</sup>弗解<sup>ふげ</sup>。多<sup>ナ</sup>。多<sup>ナ</sup>  
まれば貞良<sup>じゆりょう</sup>と。豈<sup>か</sup>人<sup>ひと</sup>と。もあくよ。もの  
其能<sup>そのう</sup>清酒<sup>せいしゅ</sup>老母<sup>おも</sup>の應對<sup>おうたい</sup>。病小障<sup>びやう</sup>醫藥<sup>いりやく</sup>と辞<sup>ことほ</sup>  
もと人<sup>ひと</sup>鳴<sup>なる</sup>と。音と音ととへとまく。

まう編を小ちかえて得るが。みはと等も皆未詔付ふらひを  
たまは日の小原也。そへ西水引りて。人の御ひとねど。え  
と辞して手を記せよと雖も大うめのじよもうた  
が絶とへよとせば。これよ因へゆ候すま。もく  
のあよ達り。印もきく。もくもくも正ぐ。急難小原  
をとやかくもよもよす。おや老けり。もくよ  
猪とぞとぞとぞとぞ。おととととととととと  
私とぞとぞ。飢うるをとととととととととと  
さあらが米穀とととととととととととと  
近思深ととととととととととととととと  
義よみよみととととととととととととと  
あくべ。君よ翁翁翁翁人

吉門 北村祐庵

事傳よ著せり。あ乃味そり天祥より頗る奢  
ふれり。無事もそくすや家富くとすと立欲る。が  
うすよ強もよ。はと達のきよよとよ。老々  
長毫田園よとよとよとよとよとよとよとよと  
わくのよとよとよとよとよとよとよとよとよと  
びくとよとよとよとよとよとよとよとよとよと  
かくとよとよとよとよとよとよとよとよとよと

才と冊山友ねみ

まう編の外へ。此人ふ割り。一筆す方西より。高まつて  
業乃蒙謝よよよと。莫念きよよとばれ。不納貢寫

乃者ノハ某のまゝだ朱絵手本也。うれば家主じ  
くあらうるどもかくせば。債ともすすのまよ。此  
ふうは療法貧家の手まれぬもとくべ。がくとく人の病  
と愈へてはつれもん。まよそへ待て。何の愈えある。  
たまうしてりあられせば。凡ねどの手あけよ。さよは  
毛張侯乃碑よ應。而病と愈へ。全詠歌多賜りを  
とべ。やうと門にれとく。

此は名護御候の肺病氣脢障ありよ達半  
金ノ石也。金紙多々頂戴。右情の面。半  
身を以て。金紙を以て。青安

と記。又。金紙。天角。青安。乃基大法天  
玉。ちよゆくらまハ坂太平碑。ちふす。お手案内の人  
より。りくわたり。碑碣。ようべく。筆力。不  
動の石像。たるよ。金加羅。伊多加の。腰。士。と。奥。も。  
此の石を。石の院。お魏。そ。そ不動の。背。瀧。て。云  
等。身。石。像。爾。生。前。是。雖。吾。死。後。是。爾。截。斷。

死。和。生。爾。吾。空。也。耳。 北山友松子。並題  
此像。乃。背。の大。を。胸。よ。吹。り。了。う。下。す。や。ば。す。よ。ほ。ス。の  
不動。く。見。る。や。て。奇。安。乃。基。う。ま。キ。い。エ。ス。と。信。り。人  
ま。よ。う。と。し。一。歎。因。造。八。顔。輝。が。草。の。達。慈。禪。師。の  
像。小。影。と。首。へ。う。る。今。ハ。少。く。も。と。那。自。像。少。年  
う。れ。少。れ。う。そ。重。象。さ。ざ。一。

卷尾句

世人ふ徳乃やう評ふ。もく人意よありや。而愚禪師を

況と毛んざたうて。ほふせんとまくけらわもあぐりまと  
船づく。はふ相州令の傍若森よしの森。若森字義候。四才にあは  
侍よそへゆかむ。詩集。遊草と書。并芭樓示す。

壬午小詩。向也。詩二首あり。

秋興招吾酒。向水。

嵐光踏破訪幽踪。

山村離外一枝菊。

石徑再邇十里松。

戶不厭遊客。

岩扃只有懶雲封。

遠來為向山居好。

冷露東啼鳴竹蛩。

又

羨着歲時隱清瞳。

獨倚石屏借晚眠。

一徑苔苔餘老跡。

半肩薪棘對仙基。

市裏日月本非別。

洞裏景光猶似遲。

陰都山中松柏翠。

秋風搖落更無私。

後文有幽子自采乃惟之を如人乃幽子と。清之  
見きやうへ。もやみにうつてたよ褐く。もや類もよひに見

## 謹志箴

白幽子

夫長於雲壑青松下

無有游觀廣覽之知

顧有至愚孤陋之累

晏然哀吾生之須臾

平日好讀書不求甚解

窺聖賢之道不慕榮利

安貪不競風日

一褐一瓢晏空不憂

今日而俟天命而已

文多寡少。印人擇得。真筆。畫の如蓮の美。いづみ。方石に刻も

表 松風窟白幽子之墓

横 白川山居隱士

背 寶永六乙丑初秋二十五日

即れにまくはり。宝永有の海。す。升菴も。今が世。氣ふつまて  
まきを功あ。まゆ。さう。ふねり。さう。白隱和尚の  
宿も。庚寅四月。す。す。ふ徳よ。奉も。が。じ。墓  
碑。ひ。あ。年。己。丑。そ。も。生。の。日。に。建。つ。も。り。ふ。  
あ。れ。二。よ。り。と。あ。る。ひ。モ。役。日。よ。き。と。も。り。あ。り。  
平。竟。隱。寺。の。お。と。ひ。と。よ。山。乃。師。と。寺。二。る。事。よ  
も。る。よ。く。ん。や。と。ひ。の。老。は。や。一。月。の。室。記。  
歌。の。や。ふ。宿。し。る。よ。と。り。ん。は。歌。手。し。む。よ。

卷之三

第三回

續近世時人傳與立大尼

時人傳跋

支画は又う餘ぐれ画乃うよりサトノ大音  
珠氏画畧十二章を備シテやうの及ミ  
有小補ノ如カレルこれハ孔夫子繪ノ  
トメハ主をほふ主を宣ふと繪の主を會  
さる事主を生うよつて義されす人  
て照寫傳神ゑくともせうもつて  
色就りて、まんれ神もくまで唯佛仙う  
像至質乃れを攝と唐か代鹽山  
文正質ちどり南山宗もく雅俗を  
評論し、王元義曰其道すま思刻以  
う画の美山休す、方一ノう画の雅

と大書難を専ね。実徳もあらむ者邦  
王室隆一は大岡三すに私画師乃森を  
褐の紀金差巨勢金是が大過て小進也  
此の名參うれども画地は今所謂  
文應画とて山水花鳥をす。唯衣冠賤  
豪貴材官殿やト多く画ではほまぢり  
て画の良き才子よしと出でるふ  
なりて近世隱士模像出れ。其の画  
用田作れども、あれ、侍等を多く描く。是  
よりれども、也、志ありされど、必ず隠士の傳  
有りし。左は、改志ありされど、必ず隠士の傳  
と記された元政乃隠士傳林氏。其堅丈

ううう、たゞ續隱士傳あり。わざわざ  
をそぞり、ひきもひけり。一曰隠  
か候。名をひきうち市牛。史  
も隠。操うるんぢり。隠うる。左  
ううう、時人。付く。乞うとあにせ  
てせきす。まくと。ひきうち。右阿丈。も  
おもひす。ひきうち。ひきうち。一曰  
隠。正月を黒す。けいふ。母よを尊  
無く。もあ見うれじ。多うへ。圖像  
をもととんをす。ふ。中年。年紀。新  
古。も。蓋葉。横琴。跋。乃制を

画よ後うらへうづくまきをうし。左のうす  
おとふひつゝ。戴安道東都賦と画  
き古時乃冠賊宦宣山川乃凡俗に爲  
ゆく止。圖うは花宣之くうう  
で画よ益うるやく。心悟りほ画くが  
重す。いづれも唯、じれり。画す。心  
かふをもくとく。心すうれ志す  
ううとゆうく。ううとく。

天明八年仲夏四月日

花顛三熊思考



# 畸人傳拾遺

嗣生

寛政二年庚戌秋八月

菱屋孫兵衛

林

伊兵衛

長村太

助

栗本喜兵衛

野田儀兵衛

平安書林

鶴鶴想四郎



